

日本科学者会議 福井支部ニュース

第3号 2003年8月11日発行

- ** 日本科学者会議福井支部
 ** 〒910-8507 福井市文京3-9-1
 ** 福井大学工学部 小倉久和研究室 気付 Tel&Fax 0776-27-8582
 ** ogura@i.his.fukui-u.ac.jp
 ** 郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部
 ** ホームページ <http://www.jsa.gr.jp/fukui/> (本部のページ <http://www.jsa.gr.jp/> からたどれます)

今号の内容

- 寄稿「『SARS』講演会に参加して」(大久保 貢)
 会員の声「機関決定と情報のあり方を問う」
 福井の科学者 91号の内容紹介(編集後記より、山川 修)
 寄稿「UAEあれこれ その2 - 旅行 - 」(永井 二郎)
 大学からの通信「国立大学法人化法が成立」(小倉久和)

2003年度後期の会費納入を早急にお願い
します。

過去の未納会費のある方は、分納でも結構
ですので、至急納入をお願いします。

「福井の科学者」91号が発行されました (再掲) 山川修 (編集長)

支部機関誌の「福井の科学者」91号が発行されました。91号は教育特集です。

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 巻頭言 | 森 透 |
| 教育 学力論議と学びの改革 | 寺 岡 英 男 |
| 授業者のための身近な総合学習 | 加 畑 久美子 |
| IPT活動のこれまでとこれから | 丹 羽 俊 彦 |
| 大学教育システムにおける多様性 | |
| - 大学統合における教育システムの意味を問う - | 小 倉 久 和 |
| 福井医科大学医学科における新しいカリキュラム | |
| - 医学教育モデルコアカリキュラムの導入 - | 安田年博, 内木宏延, 栗山勝, 岡田謙一郎 |
| 投稿論文 日本海地域の大学 | 飯 田 克 平 |
| もんじゅ裁判における高裁判決について | 渡 辺 三 郎 |
| 在宅介護支援センターの役割と機能に関する実態調査報告(2) | |
| - 地域における予防に向けたコミュニティワーク実践 - | 久常 良, 舟木紳介 |

編集後記

92号は、北陸シンポジウム特集の予定です。

「SARS」講演会に参加して

大久保 貢

2003年6月7日、福井医科大学の木村吉延先生による福井支部緊急市民講演会・支部例会「SARSについての基礎知識」に参加しました。

講演では、木村先生の優しい語り口と分りやすい解説で全く知らなかったSARSについて最新の基礎知識と状況を知ることができました。特にSARSの初期病態がインフルエンザとよく似ているため、冬に再流行する可能性に備えて秋までに対策を講じて、この流行を阻止しなければ大きな混乱になると強調されていました。

ところで、なぜ、このSARSの疫病は中国（広東省）発なのか、疑問に持ちました。私は15年ほど前、初めて中国に旅行しました。私自身、大陸的なその文化に感銘を受けて帰国しました。しかし、数日の北京と上海だけの訪問でしたが、この国の衛生状態にかなり驚きました。そして、先日あるホームページで現在の中国南西部地域は、農村部から流れ込んだ出稼ぎ労働者たちが劣悪な環境に密集して暮らしている報告がありました。また、WHOの専門家も中国南部地域を世界的疫病の要注意地帯としてかなり前から着目していたと報道されています。これらの情報からこのSARSの疫病は流行るべくして流行ったのではないかと、思っています。過去を振り返ると、この流行は19世紀の産業革命時に発生したコレラ流行と似ていると報告されています。このSARSの騒ぎで中国の衛生状態が少しでも改善されることを希望したいと思います。

こうしてみると、SARS疫病の大流行は医療の問題かというところでもなく、かなり行政の問題なのかもしれません。このSARS流行の阻止には、治療方法の確立も当然必要ですが、イギリスのコレラの根絶の例を参考にしながら、生活環境の改善をしていくことが重要であり、根本的には、人口の密集、衛生観念の欠如などの都市がかかえる課題をどう解決していくかが大きなポイントではないかと思いました。

会員の声

機関決定と情報のあり方を問う

Y生

学問の世界では、オリジナリティとそのプライオリティが尊重され、学会の査読を受けて論文がオ・ソライズされる。しかし、そういう尊重の姿勢は、政治や行政の世界では、むしろ、迷惑なものであるらしい。その世界の人たちは、自らオピニオンリーダーたることを避け、現場の実力者から先導的な提案が出て来るのを、一定の距離を置きながらひたすら待ち、成果を搾取・横取りするのがうまい。

最近、たとえば、「大学統合」、「法人化」、「トップダウン」と言う言葉を耳にする。2003年に入ってから、これらの議論の内容を決めるのは一体どのような機関や委員会であるかきわめて不透明になってきたように思われる。誰が「統合」や「法人化」を決めたのか？トップのいわゆる管理者は、決して自ら「トップが決めた」とは言わない。彼らは、国民や機関の構成員の「合意を得た」と言う。アメリカの大統領は強い決定権と実行責任を有するようだが、アメリカでは必ずしも米国民の意思を反映したものとなっていないようである。ましてや、ロ・マ帝国の再現のような米「帝国」主義が世界市民の意思に沿っていないことは明らかである。しかしながら、大衆と言われる人々の中に、「トップダウン」の決定を待つ人々が多くなってきているのではなからうか？なぜ、多くの人々は発言を控え、「独立行政法人化」などを黙認してしまったのだろうか？

明らかに、現今の情報メディアは、10年前には全く想像できなかった程度に発展している。今は、インターネットや携帯電話は必需品であり、情報氾濫の時代だ。しかしながら、大小の機関の意思決定は、最近のマスコミが批判能力や倫理観に欠けたまま米「帝国」主義の意思に従っている事に代表されるように、正体不明の「トップ」のよってなされていると思われる。

「機関決定と情報」のあり方の問題を解決するためには、古くから言われているとおり、国民ならびに各機関の構成員の良識とその日々新たなる高揚に頼るより、他に方法はなさそうに思われる。国民は、今までになく、根気の要るたたかいと努力が求められている。

「福井の科学者」91号 の紹介 (編集後記より)

国立大学法人法案が本日(7月9日)参議院を通過予定である。本来「教育」は多様性を育むべきものである。そして教育における多様性は教育実践の現場から生まれてくるだろうことは容易に想像がつく。このことから考えると、教育改革は現場の様々な知恵を如何に柔軟に教育制度の中に取り入れていくか、ということが重要である。しかし、最近の国立大学法人法案、教育基本法改定の動き、2002年度から実施されている新学習指導要領等、現場からの声をキチンと吸い上げているのか疑問に思う改革が多い。「教育は国家百年の大計」とはよく言われることだが、目先の利害関係に惑わされることなく、丹念に教育現場と議論をしながら、百年先を見た改革を実行して欲しいものである。

さて、今回は「教育」特集とし、教育現場で試行錯誤されている方たちの論文を多数収録した。巻頭言は、福井大学で日夜教育問題を考えておられる森氏にお願いした。氏には、国立大学法人化法案の衆議院文部科学委員会での審議を傍聴した際の感想を中心にまとめていただいた。これを読むと、法案の国会での審議の雰囲気がよく伝わってくる。

次に今年3月に福井大学で行なわれた、記念講演会「真の学力とは」で報告をしていただいた3氏に論文をお願いした。寺岡氏は、教育における「基礎」と「総合」の考え方を吟味して、「基礎」と「総合」の間を自由に行き来できる教育の重要性について言及されている。加畑氏は、「時間」を題材にした興味深い実践報告をされている。氏の実践は時計の読み方から始まり、実際に砂時計を自分達で作成し、他の様々な教科との関連性まで発展している。丹羽氏には、氏が平成9年度から実践されているIPT活動の詳細について記述していただいた。IPTというと耳慣れないが、知的バックグラウンドを背景とした自己表現力の育成、といわれると「なるほど」とうなづく方も多いのではないかと思う。

今年10月には、福井大学と福井医科大学が統合されるが、統合を話し合う統合協議会の下部組織である教育分科会での話を、福井大学と福井医科大学それぞれの立場からお願いした。2つの論文は書かれている視点が少々異なっているが、大学の文化の相違と考えると、興味深い。

教育以外の論文として3編収録した。飯田氏の論文は今年3月に島根で開かれた「日本海シンポジウム」で発表されたものである。渡辺氏の論文は、今年1月に勝訴した「もんじゅ」裁判の原告団の一員としての生々しい報告である。久常氏、舟木氏の論文は前号の続編である。

独り言のコラム

「テロ・テロリスト」

フセイン元大統領の息子2人を「暗殺」し、イラクの事態が改善するのではないかと期待したブッシュ大統領の思惑は外れたようだ。この暗殺作戦は米軍特殊部隊(グリーンベレー?)によるもので、密告情報をもとに奇襲した成果である。この情報提供者にはなんと36億円の報償金を出すのだそうだ。TVでこの特殊部隊の作戦担当責任者が話していたが、このような提供情報に基づいて何回も奇襲攻撃をしているらしい。情報がもたらされたらすぐさま作戦を実行する。ゆっくり確認していたら取り逃がす危険が多い。このときも、情報がもたらされてから数時間後に急襲した、とトクトクと語っていた。先週、新聞に、特殊部隊の奇襲攻撃で、ある家の家族が何人も殺されたという小さい記事が載っていた。米兵がその家を探したが何もなかったという。どうも「誤報」だったようだ。市民はいつ米兵に襲われるか、銃で撃たれるかわからない状態に置かれている。これは「テロル」ではないか、と思うのは自分だけではないだろう。数週間前、米軍車両が「自爆テロ」に襲撃され、ブッシュ大統領は「かかってこい!」と演説した。マスコミは「暗殺」にも「誤爆」にも「テロ」と言う言葉を使わない。米軍に対する攻撃だけに「テロ」という形容詞を付ける。イラク戦争開始直後、バグダッドに侵攻する米軍に対する体当たり攻撃をみてTVレポーターが「自爆テロ」と何度も絶叫していたのが大変気になった記憶がある。

マスコミはあまり報道しなくなったが、9.11「テロ」のあと米軍が制圧したアフガニスタンでも、いまだに、アルカイダの残党狩りのため米軍の「爆撃」が行われている。密告情報で行うから「誤爆」も多いそうだ(「誤爆」とは何か、そもそも、このようなものを「エラー」と呼んで許されるなら、何でもありだが)。同じことは、実はパレスチナでもある。イスラエルでおこる「自爆テロ」報道に対して、イスラエルの暗殺部隊の暗殺活動には、ミサイルであれ戦車であれ、何であれ、「テロ」という形容詞は、マスコミはついに付けなかった。

先日、私は、たまたま録画しておいた映画を観た。TVで放映された"Good Morning, Vietnam"というアメリカ映画である。ベトナム戦争時代、従軍の人気ディスクジョッキーの主人公が、請われて当時の南ベトナム・サイゴンの米軍放送局に勤めたときの活躍の話である。この映画のストーリーはさておき、この中で「VC Terrorist(ヴィ・シー・テロリスト)」という言葉が何度も使われていたのが耳についた。字幕では「ベトコン」となっていただけである。「ベトコン」という言葉は、ベトナム戦争当時、日本でもマスコミがこの言葉を無批判に使ったため、「ベトナム共産主義」の蔑称だということで、ずいぶん問題になったことがある。ベトナム戦争の末期になってやっと「南ベトナム解放戦線」という名称が使われるようになった。しかし、米軍にとっては、彼らは「解放戦士」なんかではもちろんなかったが、実は「テロリスト」だったのだ!

「テロ」という言葉は、実際はかなり政治的な立場を反映した言葉だった。私は信念として「テロ」は絶対反対である。しかし、もちろんそれは「テロ」というラベルを付けた活動だけではないし、「テロ」とラベルの付いた活動全部でもなかったのだ。

2003/8/3 (OG)

日本からUAEへ行くには、昨年就航した関西空港からUAEのドバイへの直行便がとても便利です。確か10時間前後でドバイに着いたと記憶しています。この直行便ができる以前は、東南アジアのどこかで一度乗り継ぎをしないとUAEまで行けませんでした。これはかなりの長旅（15～20時間）になり、特に一人旅の時には話をする相手もなく、少々疲れる旅行でした。直行便が就航したおかげで、UAEを訪れる日本人観光客がかなり増えてきているようです。テレビ番組にもたまたまUAEの観光スポット情報が登場するようにもなりました。直行便の威力は絶大です。

UAEの玄関口は、大きくは首都のアブダビか国際商業都市のドバイでしょうけど、圧倒的にドバイの方が有名です。巨大で新しいドバイ空港は、“中東”というイメージとはかなりかけ離れた近未来的雰囲気を感じさせています。学会等であちこちの国際空港に降り立ちますが、ドバイ空港が一番“ゆとり”のある空港だと感じます。離陸までの時間をつぶすための様々なお店やラウンジ・ベンチの豊富さは、大変なものです。これも皆、石油のお陰ではあるのですが……。ちなみに、ドバイの街並みはまさに近代的大都会であり、今も高層ビルの建築ラッシュが続いています。ドバイに行かれた方は、本当に数十年前に全てが砂漠だったとは思えないようなきらびやかな光景を目にするはずですが、有名なゴールドスーク（金製品の市場）へ行きますと、それはもうキラキラとまばゆい限りです。一方、首都のアブダビですが、一度しか行ったことがないので知識は少ないのですが、印象としては、“砂漠の中にポツンと存在し”“極めて人工的で”“きれいで”“人が意外に少ない”という都市です。

福井大学チームが実験を行っているラスアルハイマという首長国へは、ドバイ空港からタクシーで1時間程度で到着します。ラスアルハイマは、ドバイという大都会とは全く違い、こじんまりとした田舎町です。ラスアルハイマ市郊外を車で走っていると、放し飼いにされているラクダやヤギが道路を横断していたりと、のどかな雰囲気が漂います。7回も訪問したおかげで、ラスアルハイマ市内は地図無しで車の運転ができますし、私にとっては第3あるいは第4の故郷のような落ち着きやすさを感じる町になりました。

以上、UAEへの旅行、UAE国内の都市の様子を述べました。一口に“中東”といっても国によって全く様子が違います。UAE国内の都市に限っても皆それぞれ特徴があります。機会があればぜひ一度お訪ね下さい。

大学からの通信

国立大学法人化が成立

来年4月から国立大学が法人化されます。国立大学はもちろんですが、公立大学も私立大学も大きな影響を受けることは必死です。大学における教育や研究がどう変わっていくのか、どう変えていく必要があるのか、大学に身を置いている一人として、大きな関心があります。支部ニュースの紙面を借りて、大学からの通信を、短信ですが、載せていきたいと考えました。大学に所属する会員、所属していた会員をはじめ、多くの方々に「大学からの通信」への寄稿をお願いします。

福井大学では8月8日、学長による統合・法人化説明会が開催されました。そして、説明会終了後、統合後の初代学長予定者として推薦された児嶋眞平現福井大学長から、決意表明がありました。その中で、児嶋氏は外部資金の獲得を強調されました（これは文部科学省が、大学法人に対する運営交付金の算定基準の1つにしているからです）が、応用研究ばかりではなく、そのようにして得た資金を利用して基礎研究、基礎的研究を振興する、という主旨の表明をされました。福井大学のような地方の小さな大学が集める外部資金はある意味では知っています（創立50周年記念事業で3億円の寄付をやっと集めた）が、それで本当に基礎研究が振興できるのか、大きな疑問があります。まず第一に基礎研究とはなにか基本的な合意がない環境で、それが可能なのか。基礎研究ではないと分類された外部資金を獲得できない研究はどうするのでしょうか。北海道大学で35年の歴史がある流氷研究所の閉鎖方針が決まり、京都大学で熊取の原子炉を廃炉にするという、このような話しは大阪大学でも東京大学でもいくつも指摘されています。自治体が支援するだろうと考える向きもありますが、横浜市大についての廃校も含んだ答申や都立4大学の乱暴な再編答申を読むと、福井県などが、工学部やまして医学部を支えられるのか、大きな疑問が残ります。

この7月16日に電子メールで送られてきた国公立大学通信で、編集発行人の辻下徹氏は、次のようなコメントをしています。「文部科学省が召集した7月14日の全国国立大学長会議で、文科大臣は、大学の自主性を重んじる、法人化後も基礎科学を重視する等々を、いつものように強調されたそうですが、すでに、法人化に備えての組織の強化のために、大学や部局が自分自身の判断で、地味な長期的基礎研究を切り捨てるのが広汎に起きているのではないのでしょうか。

「民間的経営手法」の基本である「小規模不採算部門の整理」を行い、学問的な重要性如何にかかわらず、基礎研究の縮小・切り捨てを「自主的に」行う大学や部局の「見識」は問われますが、大学・部局等を構造的サバイバルゲームに追い込むことを主目的とした制度を導入した者は、そのような批判をすることで責任を果たしたことにはならず、その原因を構造的に除去する責務があるのではないのでしょうか。」

支部事務局長 小倉久和